
天の道と2人の不死者

闇崎風牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の道と2人の不死者

【Nコード】

N4477H

【作者名】

闇崎風牙

【あらすじ】

二つの世界：戦いは終わったはずだった。しかし、運命は2つの物語を引き寄せる。ブレイドとカブトのクロスオーバーです。（更新は不定期です。）

第0話：序章

西暦60XX年、全てが滅び去った地球で二つの何かが動いていた。そのうちひとつは目の前に広がる光景に呆然として呟く。

「やっぱり…ここだったのか…」

「いや。ここだけじゃない。」背後からの声に影は振り向き、驚きの声を上げる。

「始っ！ お前…どうしてここが？」

「剣崎、俺らは何があっても戦う。人間がいない今なら、決着をつけられるんじゃないかと思ってな。」

始、と呼ばれた影は最初にいた影――剣崎に向かってはつきりと言った。

「人間が…いない…」再び啞然とする剣崎に始は呆れたように言う。

「知らなかったのか？」「ああ。ずっと、人に会わなかったからな。」

「…剣崎、俺はもう疲れた…」「え？」

「もう良いはずだ。此処で俺らが決着をつけても…何にも迷惑はかけない。」

「始…分かった、決着をつけよう。」剣崎は頷き、スペードのラウズカードを取り出す。

「じゃあ…いくぞ」始はジョーカーラウザーにハートのAを通す。

剣崎はスペードのカードに少しだけ視線を落とした後、スペードのAをラウザーに通す。

「「変身」」「『チェンジ』」

音声が鳴り響き、2人はそれぞれのカテゴリ―・エース・マンティスアンデッドとビートルアンデッドに姿を変え、手にした武器を叩き付け合う。彼らは切りあい、くみあい、殴り合い…これでは埒が明かないと思った二人はジョーカーラウザーを武器に取り付けカードをラウズした。

『キック』『サンダー』『マッハ』

『フロート』『ドリル』『トルネード』

『ライトニングソニック』『スピニングダンス』

キックが空中で交錯し、二人は地面に叩きつけられる。

いつの間にか現れたモノリスはそんな二人を見下ろし、決着がつくのを待ち続ける。二人の戦いは、どちらかが倒れるまで続くはずだった…統制者による中断がない限り。

そのとき、モノリスに異常が起こった。

《他時元からの攻撃で損傷を確認。急速修復実行。》

《急速修復不可。バトルファイトの続行不能。》

《時元転移による修復開始。》

「な、何だ？何が起こった？」

《転移開始。秒読み後、転移を実行する。》

「はあ？何言ってるんだ？」「おいっ！剣崎！それから離れ…」

《5, 4, 3, 2, 1…ダウンロード転移》

「うわああああああっ！」

モノリスが発した光はモノリスと、…二人のジョーカーを飲み込んだ。

第0話：序章（後書き）

はじめまして。

初心者なのに、大変だと噂の連載小説を書き始めました。どうかこれからも生温い目で見てやってください。

第1話：エリアX

2009年、エリアXはゼクトルーパーに見張られ、いまだ封鎖されていた。

その周辺はうらかな陽気に包まれ、何も起こらぬように見えた…
唐突にそれが来る前は。

「うわっ!」「な、何が起きた?」「雷だ!、雷が!」「馬鹿、騒いでないで早く報告しに行け!」

- - -

「エリアX内に雷が?」「はい。幸い何も影響はありませんでした
が…」

「一応、調査したほうが…」「良いわね。田所さんにも一応上層部
に聞いてきてもらうわ。」

「お願いします。…では、自分はこれで。」

ゼクトルーパーが下がった後、岬は考え込む。…もし、シブヤ隕石
のように、その雷が何かを運んできたとすると…

「…考えすぎね。」岬は頭を振って考えを打ち消した。それはある
点で合っていることを知らずに…

「…で、なんで俺が?」「仕方ないじゃない!手が空いてるの加賀
美君だけなんだから!」

加賀美新は仕事途中に呼び出され、困っていた。「俺だってまだ忙
しいのに…」

「なんか言った?」「いえ、何も!」「とりあえず行ってきて。場
所はH-2の北よ。」

加賀美は釈然としないままエリアXへ向かった。

「えーっとたしかここ、だよな?」「はい。でも何もありませんねえ
…」

エリアX内の現場に着いたのだが、そこには何もない。加賀美はがっかりしながら帰ろうとした、と。

「隊長！」一人のゼクトルーパーが駆け寄り、加賀美に向かって叫んだ。

「あつちでワームと何かが戦っています！」「その何かって、何だ！？」「ワームではないようですが…って、隊長！」

加賀美は彼が示した方向に向かって、走り始めた。

加賀美は示された場所に着き、あたりを見渡す。するとそこには…「うそだろ…」ワームは一匹も居らず、ただ2人の人間が立っているだけだった。

「ワームなんて一匹もいねーじゃんか…」戻ろうとして加賀美は考える。

「待てよ。ってことは、あいつらがワーム…！」そう考えてからの彼の行動は早かった。

加賀美はゼクトルーパー達に指示を伝えた。この周辺を囲み、ここに居る人間を連れてゼクトへ行け、と。

数分後、ゼクトルーパーたちは包囲を完了し、突入を開始した。

第1話：エリアX（後書き）

ごめんなさい、一身上の理由でしばらく更新出来なさそうです。
まだ2話しか投稿出来ていないのに…）

スイマセン。とりあえず、暇を見つけては書いているんですが、まだ書き終えていません。

これ以上書くとなんだか言い訳のように見えるので、
今日はここで失礼します…。

第2話：遭遇

「うつ…うつ」崩れかけたビルの中で、剣崎は所々痛む身体を起こした。…ジョーカーではなく、人間の姿で。

「此処は…？」そこは自分達が戦っていたのとは違う場所。剣崎は辺りを見回し、呟く。

「あの時、一体何が起きたんだ？」自分たちが戦っていた辺りにこんなものは無かった。

「…始、何処だ！」自分の目が正しければ、始もあの光に巻き込まれたはず。

「…こつちだ。」背後から始がよろよろと歩いてきた。

「始…あの時、何が起きた？」

「さあな。おそらくモノリスがここに飛ばしたらしいが…」

そこで言葉を切り、彼は後ろに向かって呟く。

「出てこい。そこに居るんだろう？」

しばらくの沈黙の後、何かが倒れかけた柱の影から出てきた。一匹ではなく、五、六匹はいる。

その何かはじりじりと広がり、剣崎と始を囲む。2人はそれぞれのカテゴリーAを取り出し、ラウスした。

『チェンジ』

電子音声になり、2人はカテゴリーA・カリスとブレイドと表記する。…に姿を変えた。それら…人間でもアンデットでもない何かは一斉に2人に飛び掛かる。

ブレイドは手にした剣で何匹かを切り倒す。カリスはそれらの頭上に飛び、カリスアローから光の矢を発射し一匹ずつ仕留めていく。そうしてそれらは倒された。…一匹を除いて。今まで倒したものと違うそれは、人間の声で2人に言う。

「お前らは…マスクドライダーではないようだな。…今日はここまでだ！」それは後ろに一步下がり、闇に消えた。

「お、おい！待てよっ！」

剣崎は人間の姿に戻り、叫ぶ。しかし、返答は帰らなかった。

「逃げられたようだな。」

始は人間に戻る。そして背後にあった柱にもたれかかり、考える。

《あれはアンデットではなかった。トリアルでもない・・・では、あれは一体なんだったんだ？》

「くそっ！」それーネイティブは人間の姿になり拳を壁に叩きつける。…手駒を集めていたところを邪魔され、しかもそれを無に返されたのだ。ワームは残り少ない。何とかしなければ。

…そんな彼の前に、それは現れた…

第2話：遭遇（後書き）

こんにちは。風牙です。

前あんな発言をしておいて、何投稿しているんでしょう…

言ってる事とやってる事が食い違っていますね…

では、少し早めに、失礼します。

第3話：逃亡

「大人しくしろ！さもなくば撃つ！」

ゼクトルーパーの一人が2人に向かって叫ぶ。そのうちの一人はおろおろしているが、もう一人はまったく動じた様子もなく、何かを片方に言う。

「さあ、こっちにこい！」

ゼクトルーパーたちが一歩前に進んだ瞬間。彼らはゼクトルーパーに向かって走り、その頭上を飛び越えた。そして着地すると窓の外に身を躍らせた。

「お、追えええっ！」

加賀美は叫ぶ。しかし、頭の片隅では分かっていた。もう、捕まえることは出来ない。

剣崎と始はビルの二階から飛び降り、着地する。外にも同じようなものが居る。しかし、戦うのは得策ではない、と考え、飛び越える。そして彼らは走る。…後ろから聞こえる静止の声も聞かずに。

やがて、叫ぶ声も聞こえなくなった。どうやら、振り切ったようだ。

「あいつら、何なんだ？」

「…さあ？人間だとは思うが。」

「なあ、始。モノリスが言ってた『時元転移』ってどういうことだ？」

「分からない。それに、ここは…俺らがいた世界じゃない。」

「えっ…それって、つまり…」

彼は言葉を切り、辺りを見回す。

「誰か…いる！」

剣崎は瓦礫の山の一つに駆け寄る。

「おい！聞こえるか？おいっ！」

「瓦礫の上に横たわる一人の人間。」

始も近づき、体の様子を見る。

「火傷をしているな。程度は軽いが…」

始は彼を寝かせ、呟いた。

「とりあえず、こいつが起きなければ、何も話が始まらない。」

「くうつ…」

辺りが薄く闇に包まれ始めた時、彼は目を覚ました。

「おっ、起きた！なあ、お前、自分の名前が分かるか？」

彼の前に立つ影・剣崎である・は問うた。彼は答える代わりに顔を上げ、聞く。

「…君は、誰だ？そして、ここは？」

「えっと、俺は剣崎。剣崎一真。で、君は？」

「僕は…」

と、そこにもう一人が近づき、言う。

「起きたようだな。で、何と言う名前だ？」

二回も同じ事を聞かれた彼は呆然とした後、笑い始めた。

「そんなに矢継ぎ早に聞かないでよ！僕は日下部くさかへそ総司、だよ。」

後から来た方は苦笑し、言った。

「俺は相川始だ。で、聞きたいことがあるんだが…」

第3話：逃亡（後書き）

どうも。風牙です。

台風で休校になったため、投稿しました。

それにしても…戦闘シーンは書けないし、書いたら書いたで酷すぎたし…

とりあえず、ご意見ご感想お待ちしています。

10月11日、改行部分を手直しました。

第4話：追跡

「緑色の、人間じゃない者？」

「うん。それについて知りたいんだけど…」

日下部と剣崎は一夜をと共に過ごすとともに仲良くなり、朝にはか
なりの事を聞きだしていた。日下部の言う事によると、この世界で
は、35年前に隕石が落ち、渋谷とその周辺は廃墟と化している。
そして…

「ワーム？」

「うん。その隕石に乗ってやってきたんだ。人間に擬態して、人間
に成り代わっていくんだって。」

彼らの会話を横で聞きながら、始は考える。

《ワームなんて俺たちの世界には居なかった。やはり、ここは別の
世界のような…それにモノリスはあの光の中にいた。この世界に
飛んではいるんだろうが…。》

ふと、視界の奥で何かが動いた気がして、それに目を凝らす。

「何だ？あれは…」

日下部は呟きに誘われたように、そちらに目を向ける。そして、そ
の姿を目に留めると叫んだ。

「あいつら…！しつこいよっ！」

彼は立ち上がり、ゆっくりと歩んでくるそれらを睨みつけた。

「あいつらって、何だ？」

剣崎は彼に訊ねる。

「…ワームのほかにもう一つ、人間に擬態するやつが居るんだ。あ
いつらは、それ。」

それらはゆっくりと日下部の前に立ち塞がる。そして、代表らしき
一人が言を紡ぐ。

「擬態君？そろそろ諦めたらいゝんじゃないのかな？」

「黙れ…！」

「それに、君は所詮ネイティブ。人間と、しかもたった三人だけで俺らに逆らえるとも思ったのかな？」

「ちよ、ちよつと待てよ！あんたら、一体何なんだよ？」

「俺らはその擬態君と同じ人でない者、ワーム。んん？その顔見ると、知らなかったみたいだね。」

「黙れ…黙れ乃木！」

日下部は乃木、という男に向かって叫ぶ。

「僕は決めたんだっ！人間の中で、日下部総司として生きてくつて！」

「ふん。つまり、仲間になる気は無いって事だね。んじゃあ、力づくでいきますか。」

乃木は口調を崩さずに言い、自分の姿をワーム…カッシスワームに変えた。

日下部はもう一度乃木を睨み、呟いた。

「ゼクターが壊れてなきや、こんな奴倒すのに…」

第4話：追跡（後書き）

どうも。風牙です。

たてつづけに更新しました。

本当は来月の予定だったのですが…

11月が多忙な為、今月にやらかしました。

さて…今回は逃げました。

…だって、戦闘シーンが書けない…

だからってゼクター壊さんでも…

でも、ダークカブトは出す！出してみせる！

…出来るのか？

…頑張りますので、ご意見ご感想、お待ちしております。

第5話：争い（前書き）

どうも。風牙です。

あんなだけ言っというてさっさと投稿しました。

そして、色々と非難が来そうな回です。（本気）
では、後は後書きに回して、第5話です。

第5話：争い

「……」

両者の間に沈黙が流れる。先に動いたのは、カッスワームだった。真っ直ぐに突っ込んできた為、咄嗟に反応できなかった日下部は足に切り傷を負う。

そのまま止めを刺そうと、カッスワームが腕を振り上げる。

ガキンツ！「……！」

だが、それを邪魔する剣崎。そこら辺から拾ったであろう鉄の棒で、それを受け止める。

その間に、日下部はギリギリと下がる。

「とにかく、絶対にお前らにはついていけない！」

そう叫んで、彼は走っていく。彼を心配してか、始もその後を追う。彼が走っていくのを見届けると、カッスワームは棒を剣崎からもぎ取る。

咄嗟に身構える剣崎。だが、カッスワームは棒を投げ捨て、乃木の姿に戻る。

「……ふん。まあ、良いや。」

そう呟いて、乃木は踵を返す。そして剣崎に背を向け、歩き始めた。剣崎はその背中を暫し睨んでいたが、日下部たちが走っていった方へ歩いていった。

「……乃木様。」

「何だ？」

彼に、後ろに付き従っていた者の一人が尋ねる。

「何故、何もせずに戻って来てしまったんですか？」

その質問に、暫し足を止める乃木。そして、にんまりと笑みを浮かべた。

「あいつだけだったらすうしてた。だが、あの人間二人を殺すのも勿体無いと思ったからだ。」

そして口を一旦閉じる。そして口の中で呟く。

「いずれあいつも、俺達の味方にならざるをえなくなる。いま、無理をする必要は無い。」

——そう。急がなくても良い。あの二匹は、普通の奴とは何か違う。今殺すのは、勿体無い——

第5話：争い（後書き）

さて、今回は謝る点が2つほど。

まず一つ目。

・今回は、前の後書きで言っていた「酷い事になった戦闘シーン」の残骸です。

知ってますか…本当はここで日下部変身！だったんだよ…

かわいそうな日下部君…

そして2つ目。

・乃木さんのファンの方（居たら）ごめんなさあーい！

復活何度目だよ！とか、人格変だろ！とかは…

見逃してください。あと殴るのはパーでお願いします。

では、そろそろ言い訳がましいので、ここで失礼します。

ご意見ご感想お待ちしております。

第6話：思案

ZECTの実験室。

いくつもあり、それはさながら迷路のよう。

その奥の、存在が忘れられた『資料室』の中。

そこにあるのはたくさんの資料と、…怪物が一匹。

怪物…いや、ワームはその姿を人間に変え、呟く。

「何故だ…？何故俺はここに居る？」

剣崎は顔を上げ、遠くに目を凝らす。

少し遠くにだが見える金網。…そして、黒い人影。

それは、昨日彼らが遭遇したモノに酷似していた。

…あの後、日下部は暫く蹲っていたが、やがて話し始めた。

「ここはね、エリアXって言って、ワームが落ちてきたところなんだ。」

僕はここから出たい。多分、夜になればあの黒いやつ…ゼクトルーパー？も、いなくなるよ。

最近ワームが事件を起こしてるわけじゃないしね。…彼はそれだけ言って、さっさと口をつぐんだ。

それを確かめるとともに、どこまで行けば出られるかを目認するために折れた鉄塔に登ったのだが…

「（さすがに暗くなったら見えないよな…）」

ここまで登る前に気づけばよかった…と反省していると。

「（ん…？あれ、帰ってく…）」

ゼクトルーパーとやらの親玉らしき男が、見張りまで連れてどこかに去ってしまう。

「（うーん…不用心だなあ…）」

そこまで考え、身を震わせる。春先といえども、まだ風は冷たい。彼は地上へ飛び降りた。

相川始は考えていた。

なぜ、この世界に飛ばされた？自分の世界でもないこの世界に、なぜ…？

原因はモノリスで間違いはなさそうだが…

そして、目の前で寝息を立てている…日下部、という奴は、人間ではない。

ジョーカーの感覚が、そう告げている。

統制者の行方もつかめず、あの時発した言語も気にかかる。

「（天王路のこともあるからな…また利用されると厄介なんだが…）」

考える事は山積みだ。昨日のワームの事、それに…

ガシャーン…

外から聞こえた音に気を逸らされ、彼は考えを中断させた。

「痛ててて…」

落下までは良かったが金網の有刺鉄線上に着地しかけ、あわてて向きを変えた。

結果、地面に叩きつけられ、背中を痛めに打ってしまった。

「無茶はするもんじゃないな…」

さっきまで登っていた鉄塔は見上げてみればかなりの高さで。

これが人間の身だったら…と考えると、ぞつとくるものがある。

苦笑し、塔の鉄骨に寄り掛かりながら立ち上がる。

そして、彼はふらふらとよろけながら、瓦礫の山を降りていった。

第6話：思案（後書き）

さてさて、こんなに自分の首、絞めちゃって大丈夫かな？
…
どうも、風牙です。

引き続き、剣崎たちサイド。

…言っておきますけど、剣崎に墜落してもらったのは、嫌がらせではないですよ！

…危険思想は、排除しなきゃいけないんだ…！（いきなり何を言い出す）

さて、作者失踪、と言う事が在るそうですが、僕の事かな？と思う
今日この頃。

では、今日はこの辺で失礼します。

第7話：転換

此処は、ビストロ・ラ・サル。

昼のかき入れ時も終わり、店内は静かになっていた。

其処に、1人の来客。

「いらっしゃ…天道。」

「ひより、いつものだ。」

「…ああ。分かった。」

あちこちの国への放浪から帰ってきた天道は、椅子に座る。

注文を取ったひよりが厨房に入ると共に、ドアがもう一度開かれる。

「あのー…天道、居るか？」

「何だ…加賀美。」

「…エリアXにワームの反応が出たんだ。」

「とりあえず、座れ。」

「あ、ああ…」

天道に促され、向かいの席に座る。

「で、そこまではまあよかったんだけど、そこに行ったら人間が2人しか居なかったんだよ！」

「そいつらがワームでない、という事か？」

「だって、ワームだったら俺らを攻撃したりするだろ！でもあいつらは、俺たちに何もせずに」

「声が大きいぞ、加賀美。」

「っ…とにかくなんとなくだけど、あいつらはワームじゃなくて、他にワームが居たんじゃないかって俺は思ったんだけど…」

でも、それだったら何であそこにワームの反応が有ったんだ？と首をひねる加賀美をよそに、

天道は思考を巡らせていた。

そして、彼は昼食を終えて、店を出て行った。

日が暮れ初め、道を往く人も、どこか急ぎ足で自分の家へと帰っていく。

そんな中、人々とは逆方向に歩く人影が一つ。

いうまでも無く―天道である。

《加賀美の話が本当だとすれば、その二人組とやらはワームと戦える力を持っているか、

クロックアップでも追いきれない速さで行動できるワームがいるか

…いずれにしても情報が少なすぎる…！》

彼はかなりの速度でエリアXへ歩いていった。しかし、彼が行動を起こすのは、少しばかり遅かった。

エリアXではもう、物語が動き始めていた…

第7話：転換（後書き）

あああ…どうもこんにちは風牙です。

新型インフルに感染二回目…もれなく風邪とインフルは貰いますね、僕。

まあそこら辺は置いていて。

やっとかさ天道登場。

ドンだけ引き伸ばしたんだよ、自分…

やっぱりもうちょっと頑張った方が良いんだよ！

補修にかなり追われてるけど！課題も終わらず2日は寝てないけど！
…まあいろいろ置いといて。

では、新年明けましておめでとぅございます。
今年もよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4477h/>

天の道と2人の不死者

2010年10月10日10時52分発行